

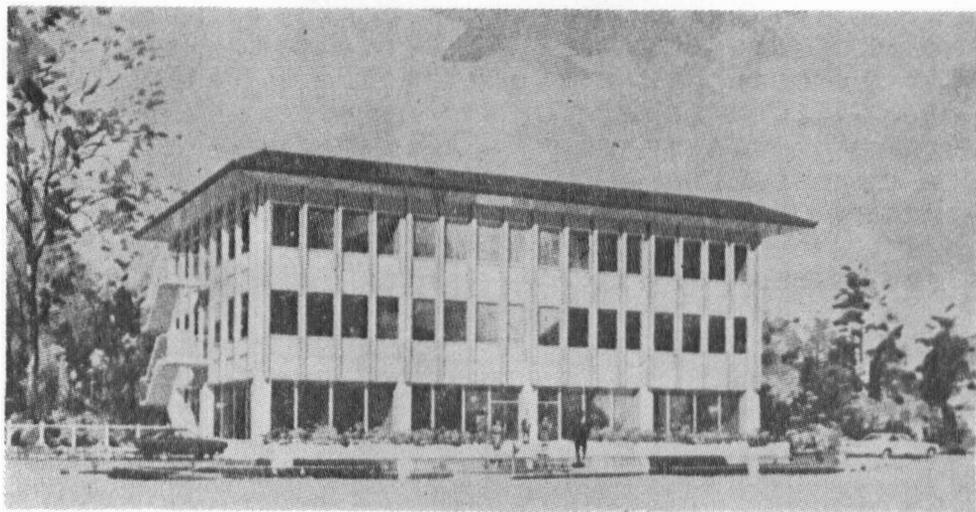
創立百周年記念事業

1. 記念事業の準備

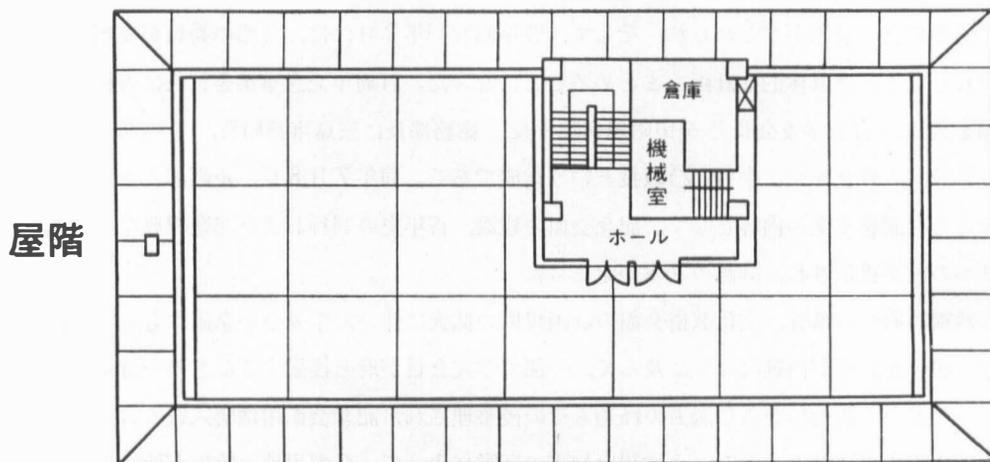
昭和37年、本学が創立90周年を迎えたとき、弓削学長を中心として、創立100周年の計画があれこれと話題にされた。その後、昭和41年にいたって、吉村学長は100周年の記念計画を公式の話題としてとりあげ、翌昭和42年6月17日、大学と学友会が初めてこの件について会合をもつに到った。学友会の内部では、第2次大戦前(昭和8年来)に一度計画された学友会館の建設の希望が表示された。新しい学友会館の運営を基盤として、より積極的な学友会活動が期待され得るからである。その頃、建設の場所については、府に所管が移されることになっていた西構(現在の府立文化芸術会館)の一部が要望されていた。同年8月には百周年準備委員会の構想がまとめられ、そして、翌年昭和43年2月には、各部の委員が委嘱され、それぞれさらに具体的な計画をまとめることになった。百周年記念事業委員長に吉村学長、副委員長に古玉学友会長と金田附属病院々長、総務部長に三島事務局長、企画部長に山田(博)教授、募金部長に中村(文)教授という構成である。同年7月8日、企画部より募金を対象とした記念事業の内容として、記念会館の建設、百年史の刊行および記念祝典なる事業の3つの柱が提示され、計画の基本が定まった。

西構の府への移管、文化芸術会館の計画規模の拡大に伴い、学友会が念頭にもっていた記念会館の建設地が白紙になるに及んで、一部の学友会員が府と接衝するなどの一幕もあったが、学友会と西構にからむ過去の経過もその後整理され、記念会館用地購入費も含めて1億の予算を大学に計上するという蜷川府知事の好意によって、会館用地の物色が始められることになる。

その頃、全国の学生運動はいわゆる新左翼思想が台頭し、異様な気運がただよい、本学も次第にこの渦中に巻きこまれてゆく。西構の移管問題もひとつのきっかけになって、昭和44年の紛争の年を迎える。学内騒然とし、100周年の準備どころではなくなってしまった。しかし、一時はどうなるかと案ぜられた大学紛争も、線香花火の如くあえなく消え去り、同年秋には大学は一応正常化に復し始めた。この間、古玉学友会長の努力により、梨木神社の境内地に記念会館用地が見出され、神社側の要望もあったため古玉学友会長と、熊谷梨木神社役員の間で話はすすめられ、昭和44年12月17日、京都府と梨木神社との間で正式に売買契約

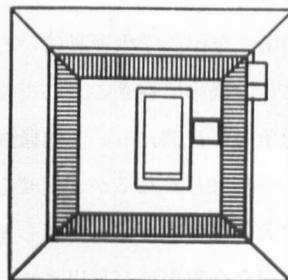


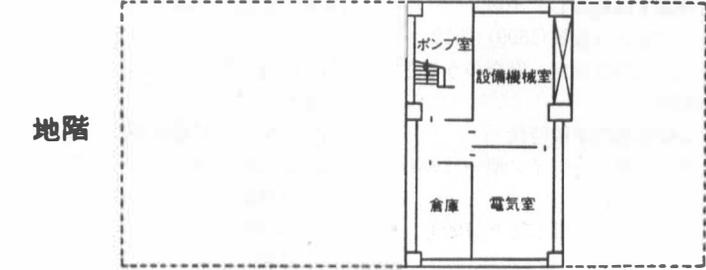
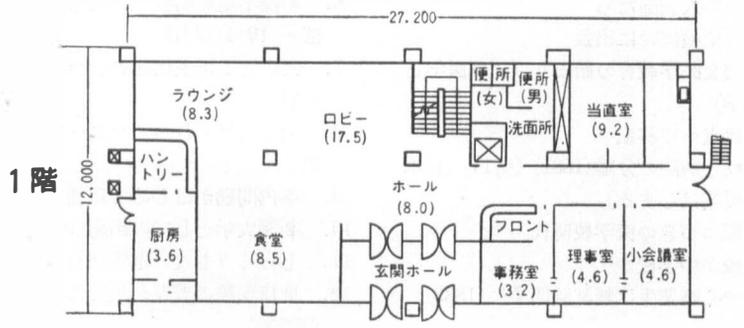
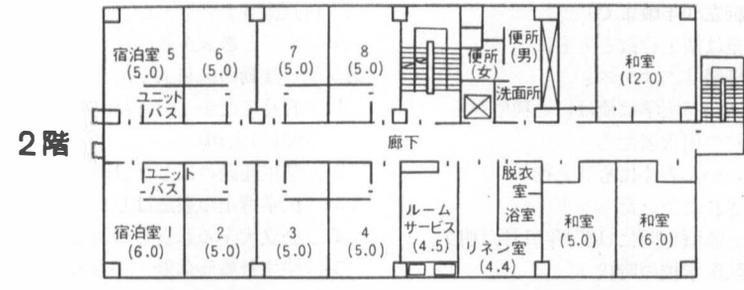
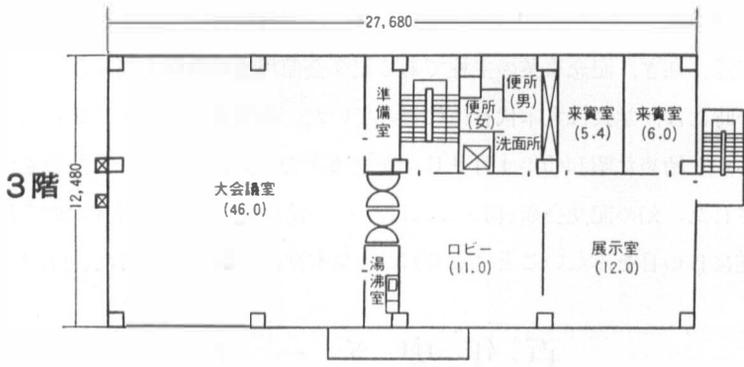
まぼろしの記念会館



	m ²	坪
地階	81.60	24.68
1階	307.18	92.92
2階	345.44	104.49
3階	345.44	104.49
屋階	49.91	15.09
計	1,130.20	341.88

屋根伏図





会館平面図

が締結、代価59,488,000円が支払われ、同月18日には所有権移転登記がすまされた。かくして府当局の好意に基き、記念事業の支柱である記念会館用地の確保も終わったことになる。

すでにこの時には、学長は丸本代行に代わっていた。紛争後のスランプから大学も正常化のピッチがあがり始めた昭和45年4月8日、記念事業委員会において、記念会館の建設の具体案が承認された。幻の記念会館(何となれば、その後の有為転変、後述の如き経過のため、この建物は遂に日の目をみないことになる)は、梨木神社に得られた用地(神社の東南部 258

百年史テーマ

第1部 (創立80年頃まで)

第1章 出発は衛生行政とともに

1. 「天皇帰リタマワズ」
2. ヨーロッパ医学は検ばいと種痘から
3. 療病院の出資者たち
4. 医師のかんとくにもひと役
5. 解剖されたひとたち
6. やっと診療専門に(1874年11月)(明7)

第2章 病院医学校の時代

1. 日本はじめての公立精神病院
2. お雇い外人教師たち
3. またもや検ばいに出張
4. 本格的な医学教育の始まり(正則医学と通則医学)
5. 現在地点への移転
6. 医学校と病院の分離(1881)(明14)(日本語での授業はじまる)

第3章 困難つづきの医学校時代

1. 医学校か中学校か?
2. ようやく卒業生は無試験開業に(1883)(明17)
3. 府税なしの独立採算(1888)(明21)
4. 教諭の海外留学は退職してから
5. 京都帝国大学成立の波紋(1899)(明32)
6. 外来は京大、入院は府立一府会のうごき—(1900)(明33)

第4章 前進する医学専門学校時代

1. 療病院は学校付属に—ドイツ型—(1903)(明36)
2. 職員の公費海外留学のはじまり(1903)(明36)
3. 卒業生がはじめて医学博士に(1909)(明42)
4. 効果もうひとつの臨床教諭いれかえ(19

14)(大3)

5. やっと教諭が教授に(1917)(大6)

第5章 激動の医科大学時代

1. 容易でなかった昇格運動(京大との関係)(1921)(大10)
2. 学生運動のはしり(1923~24)(大12~13)
3. 医学博士の製造はじまる(1975)(大14)
4. 公立大学の悲哀をつぶさに(1931)(昭6)
5. すずむ戦時体制—奉公会と学友会の分離—(1941)(昭16)
6. 準備不足の拡張—伏見分院、女子専門部—(1944)(昭19)
7. たかまる民主化運動(1945~1946)(昭20~21)
8. おしつけられたインターン制(1946)(昭21)
9. 学内問題がはじめて裁判に
10. 新制大学としての出発(1952)(昭24)
11. しっくりしない進学課程と大学院の設立
12. 健康保険の普及が裏目に(皆保険—1961, 昭36年)

第2部 (以後100年まで)

第6章 せまられる脱皮—あたらしい大学をめざして—

1. 問題は医学の進歩から—抗生物質その他—
2. インターン撤廃運動の日本の特色
3. ふたたび学内問題が裁判に
4. 基礎医学の将来はどこに?
5. 臨床医の養成は病院で
6. 必要な社会的要請への対応(居住環境の整備)
7. どう生かす単科大学の利点

坪)に鉄筋3階建、建坪約327坪の規模であった。記念会館の建設は中村(恒)教授が担当し、同時に記念事業の柱となる百年史の刊行は三宅教授、祝典の準備は小田教授が担当して準備がすすめられることになった。

この事業の3本柱は、募金によってまかなう企画である。案は出揃っても募金が達成されなければ画の餅におわる。募金部の状況まちということになった。学友会の内部でも宿泊設備を重視した記念会館の内容には批判もあって募金の前途はあやぶまれた。弘報活動が要求されて「学友会通信」が改題され「青蓮会報」が刊行されることになった。その第1号は昭和45年6月に出されている。以後この青蓮会報を通じて募金をはじめとする事業の計画が展開されてゆく。募金は、目標1億、開業同窓医師5万円、勤務医師3万円、名誉教授、教授5万円、助教授、講師は3万円、助手2万円、その他1万円の割り当てで、後で幻となった記念会館の完成予定パンフレットと共に依頼された。何回かの募金部委員会がこのために重ねられた。

百年史は、病後日の浅い三宅教授が日々莫大な時間と労力を費し、周到な準備が進められ、昭和46年秋には、主要なテーマが、各執筆者の分担と共にとり決められ、B5判、横書きなどと、この百年史の仕様も次第に固められてゆく、記念日まであと1年というムードがすべての準備を盛り上げていた。

昭和46年7月には、学長は中村恒男教授と代わり、記念事業の準備委員長は3代目に受け継がれた。この年の暮には、案ぜられた募金も5,500万円を突破し、2,3の大口法人の協賛を予想するとはば計画は実現可能の見通しとなった。そこでいよいよ会館建設工事の具体的着手の段階となるが、この辺りから、梨木神社との対応が予測せざる障害にのり上げ始める。ことの起りは、梨木神社内部で境内地を売却し、神社の運営の基礎を固めるため参集殿なる集会場をつくるという計画が徹底していなかったことを背景に、用地内に建てられていたところの宮司家族の不法建築物の立退き問題が内部的に解決していなかったことによる。不幸にして、数年来の国内の公害問題の世論台頭は、市街地の緑の保存に過度の神経をたてる時代に移っていたことや、公のとりに決め、住民運動的反対ムードが社会に一般化していたことなどが事態の解決をむつかしくした。加うるに、第3者の介入などがあって、立退き問題は、緑の保存という住民運動的なものに飛躍し、記念会館建設反対運動に進展し始めた。昭和47年春頃には募金は予想を上回るに到ったが、創立記念日に記念会館の建設を完工するためのデッドラインは事態の解決の見通しもないままにすぎ去ってゆく。記念事業委員会は、高島、木戸、大森、水越を特別委員とし、鞍岡事務局長や飯沢庶務課長は、対策に振り廻されることになった。加うるに、風致に関する行政担当である京都市が、終始あいまいな姿勢を示したため、計画は軌道にのらず、せめて当日までに基礎工事だけでもすませた

いとする関係者の熱望も空しく、昭和47年11月3日の記念日を迎えることになる。

募金の対象を失った記念事業は何としてもむなしき空気がみなぎる。幸いにして100周年をめざして、繰り上げ工事が進められた臨床学舎は、すでに昭和46年秋に完成し、翌47年初夏には、長年の懸案であった花園学舎が完工し、ここに本学キャンパスから木造建築は一掃され、新しき世紀を迎える鼓動が息吹き始めていた。また、質的にも「医療センター」が併置され、府民と共に歩んだ本学100年の願いの一つが具現化されてもいた。学外一般に対してムードを高めるため、京都新聞1頁全面を借り切った「健康特集」が「京都府立医科大学100周年記念」と銘うって連載されることになった。これには、百年史担当委員による「百年のあゆみ」なる本学の歴史のまとめも含まれ、昭和47年7月27日の第1回から記念日当日の11月3日まで、平均毎週16回連載された。新聞界においても珍しい大胆な企画で、この方面の業界筋を驚かせたが、内容は、府民の医療を守りながら育った本学の今日の叡智を、ひろく府民に知らしめるのがねらいで「子供の健康な成長を願う」、「健やかな赤ちゃんを生むために」、「心の健康を考える」、「ヒフの健康管理」、「聞き話す機能を考える」、「胃ガンを克服するために」、「ねむりを分析する」、「老化をふせぐために」、「交通災害を分析する」、「高令者と泌尿器疾患」、「生命の神秘と尊敬」、「腎臓移植を解明する」、「ガンの早期発見」、「目をたいせつに」、「地域医療を考える」、「京都府民の健康を願って」などの内容であった。

連載が始まると、問い合わせが関係者に殺倒したため、9月頃には、これを一冊の縮小判にまとめることになり、「京都府民の健康をまもって」と表題がつけられて約8,000部が印刷された。かつ、記念式当日に間に合すため、最後の2篇は予めオフセットされて新聞に印刷されたことや、担当した京都新聞春名記者は、秋頃には、医学評論家なみの知識をもつに到ったなどのエピソードが残っている。

100周年記念日近くなると、当日の祝典準備や園遊会の企画（グランドホテルが出張した）などが、小田教授の担当の祝典委員会のもとで準備が進められたが、さまざまな話題が残っている。

100周年を記念して記念品を渡すことについて祝典委員会で色々と論議が交された。昔ながらに紅白の饅頭を渡すべきだという意見もあったし、また家庭用品という人もあった。まさに昭和元祿を思わせるところであったが、こうした審議が何回か繰り返された結果、医大百年の歴史と現在の医大をとらえ、そして未来像をテーマとしたものをパンフに作りあげ、これを記念品とすることに決まった。その結果、早速パンフ編成委員会が発足することとなり、佐野、井端、水越、上田らがあたり、編集は鞍岡香一事務局長が担当した。

しかし、これらは何をもって表現するかに頭を痛め色々と苦慮するところが多かった。今

や通り一ぺんの印刷紙のようなものでは通用しない時代となって来ている。中でも最も苦慮したのは、医療と医学の未来について如何に表現するかということであった。関係者一同は、夜遅くまで真剣に審議を行なったものだった。各人の案は多種多様に広がり、話のつきない程のものとなった。

こうした中で、鞍岡事務局長の発案で「宇宙遊泳」ということに決まった。これはまさに百年の展望に立てば、月旅行も子ども一般社会人にも可能となり、日の目を見た名案であると称賛された。

ところが印刷まぎわになって、アメリカ宇宙局の著作権使用許可がなければ掲載出来ないという情報が入って来た。このため何とか著作権の承認を得る方法はないものかと、色々と審議し苦慮するなかで、諸先輩をとおして外務省へ電話すべきだという意見もあり、いやアメリカに詳しい人を探し対策のご教授を願うべきだと、次から次へと議論が交わされ、白熱したものだ。そうした意見の出る中で、最近アメリカから本学に帰任した薬理学教室の栗山欣弥教授に承認手続きをお願いすることが最適だという意見で結論を見るに至った。

早速、電話に取りかかろうとしたところ、もはや時遅く夜の11時を過ぎており、夜分遅く電話するのも失礼とあって、一応その話は打ち切りとなった。このためコダック社に京都アドコンサルタント社から、承認出来るものを探す様に依頼することで落ち着いたが、パンフに使用した写真は、こうしたエピソードを生みながら設定されて行ったのである。

出来あがりのパンフは、蛸川虎三京都府知事、中村恒男学長の挨拶に始まり、医大のたえて来た百年の歩みと、現在に貢献する姿を適格に表現し、歴史をかえり見ながら次の百年の展望を立て、そこに医大の姿を見ようとするものであった。そこには24時間勤務という特殊性もあったし、小都市医大というものもあった。そして京都府立医科大学が府民をいかに守って行くかという医療の展望もあった。

このパンフレットは先の健康特集と共に記念日当日参加者に配布された。

記念会館の建設を除いて100周年記念の準備は略々出揃ったことになる。

募金は、学友の他に、松下電器、医薬品協会、京都銀行の協力も加って、申込件数2,156、申込金額129,583,000円と目標1億をはるかに突破し、これを基盤とする記念事業の3本柱と共に、大学は100周年を記念して臨床学舎、花園学舎を完成、また医療センターを設け、更にアクセサリーとして、前述のパンフレットや健康特集などが加って、はなやかなものになった。また、記念事業の内容で、本学附属病院前庭や、基礎学舎前に美事な庭園が完成し、臨床共用研究室には研究設備の一部が、図書館にも設備、書籍が納まるなど、数々のきめ細いうるおいがもたらされた。

記念会館の建設は、遂に持ちこしになり、昭和48年に入り、梨木神社に建設することは断

創立百周年記念事業費補正予算

(47.12.8)

収入

(単位 千円)

事 項	予算額	補正額	計	備 考
1 寄 附 金	100,000	29,000	129,000	11月末申込額 2,156名 129,583 収入済額 2,027名 123,195 収入見込額 129,000
(1) 百周年記念事業寄附金	100,000	28,000	129,000	
2 会 費	1,500	△ 1,063	437	
(1) 記念祝典園遊会会費	1,500	△ 1,063	437	1,000×437人=437(収入済)
3 府 助 成 金	40,000	0	40,000	
(1) 百周年記念事業助成金	40,000	0	40,000	
4 預 金 利 子	0	3,400	3,400	
(1) 預 金 利 子	0	3,400	3,400	
合 計	141,500	31,337	172,837	

支出

事 項	予算額	補正額	計	備 考
1 記念会館建設費	102,800	14,550	117,350	
(1) 設計監理委託料	4,000	0	4,000	
(2) 基本工事費	72,000			
(3) 冷暖房工事費	12,000	10,800	105,800	
(4) 初年度調弁費	11,000			
(5) 初年度事務費	3,800	0	3,800	
(6) 文化財発掘調査費	0	3,750	3,750	坪15,000円×250坪3,750
2 百年史刊行費	8,800	0	8,800	
(1) 編集集費	1,000	0	1,000	
(2) 出版版送費	7,000	0	7,000	
(3) 発行費	800	0	800	
3 記念祝典費	7,000	1,387	8,387	
(1) 式会場費	400	0	400	
(2) 余興品費	400	0	400	
(3) 記念品費	3,000	0	3,000	記念パンフレット印刷費
(4) 園遊会費	1,350	1,161	2,511	図遊会料理代等 見込額
(5) 雑費	1,850	226	2,076	案内状・式次第・記念パンフレット 用封筒印刷費,案内状・記念パンフレット 郵送料,関係者贈呈品費等
4 校友会基金活動助成金	1,600	0	1,600	
(1) 校友会募金活動助成費	1,600	0	1,600	
5 事務費	4,000	0	4,000	
(1) 賃料	600	0	600	
(2) 旅費	200	0	200	
(3) 消耗品費	250	0	250	
(4) 会議費	200	0	200	
(5) 印刷費	1,400	0	1,400	
(6) 電話料	240	0	240	
(7) 郵送料	500	0	500	
(8) 振替手数料	110	0	110	
(9) 学内協賛事業後援経費	500	0	500	
6 資料保存費	0	3,014	3,014	
(1) 資料保存費	0	3,014	3,014	マイクロフィルム 1,500, K B S録画プリント 650 資料 管保 庫 164, 式典映画編集 520, 鏡 置台 100, アルバム 80
7 大学施設設備充実費	0	11,738	11,738	
(1) 大学施設設備充実費	0	11,738	11,738	臨床共用研究室および図書館整備 費 10,000 病院前庭記念会 館南庭造園費 1,738
8 記念会館運営基金積立金	15,800	0	15,800	
(1) 記念会館運営基金積立金	15,800	0	15,800	
9 予備費	1,500	648	2,148	
(1) 予備費	1,500	648	2,148	会報発行 費補助 648
合 計	141,500	31,337	172,837	

念せざるを得なくなった。荒神口の現学友会館を改築することに決断されたのは、9月18日の代表常任委員会である。その後建築委員会は改組され、新たな計画が練られ、今度は順調に準備が進められてゆく。しかし建築確認が京都市より得られたのは48年の暮も迫った12月13日である。建築費が暴騰し、この百年史が刊行される頃には、建築委員会が苦慮している頃になる。完成は、本学の創立102周年記念日が目標として、日程が組まれている。

2. 創立100周年記念日を迎う

1972年(昭47)11月3日、本学は創立100周年記念日を迎えた。

この日は非常な悪天候に見舞われて、激しい雨降りとなった。このため千数百名におよぶ出席者の足が気づかわれ、消沈の面持ちだった。しかしながら、雨の中を平然と参列される人が次から次へと押し寄せて、受付にたずさわる者は大変な忙がしさに動きまわった。

出席者には、国会議員、国立大学の学長、医学部長を始め、各界からの名士たち、そして家族同伴者に至るまで、色々な人々の参列であった。

式典は、午前10時、司会者飯沢庶務課長によって幕が開けられた。式場内は感激と興奮に包まれる中、本学交響楽団の「大学祝典序曲」が静かに流れ厳粛な儀式のスタートであった。そして祝典委員長小田完五が緊張した面持ちで、開式を宣言し、本学コーラス部の先導による学歌斉唱が続いた。

中村恒男学長は、百年の歴史に堪えた喜びを感謝し、未来に向けて大きく^{ばた}羽撃いていく大学のあり方を述べ、嵯川虎三京都府知事は、歴史の尊さと称え、人を守ることの尊さを説いた。祝辞においては、厚生大臣の代読があり、橘堅太郎京都府議会議長、古王太郎学友会長がこれに続いた。そして最後に谷附属病院長が、閉式の辞をのべた。

この間わずか1時間ではあったが、儀式は大学百年の歴史にふさわしいものであり、聴衆はいきをのんでいた。式が終り狂言に移り、茂山千五郎社中による三番三で、心を休めた。

式の後に予定された園遊会は、鴨川河川敷で行われ、用意された三百数十畳敷の大きなテントの中で、肩をひしめく程の多数の参加者があり、昔の語らいに肩をたたいての盛況であった。熱狂高まる中で、昔なつかしい学生服に身をつつみ、橘を印した制帽をかぶり、下駄ばき姿で太鼓をたたいて音頭とる寮歌祭もあり、数百人もの人が歌を口ずさみ、鴨の河原をところせましと歌いあげた。

「比叡は明けたり鴨の水 学城立てり儼として」
まさに永き歴史に生きぬいた喜びとするところであった。

そして翌日の11月4日、文化芸術会館で記念講演が行なわれた。

講演には京都府知事のほか、本学教授3名が名を連ねた。この日も天候は悪く、聴視者の足が心配されたが、幸い大雨とならず、ますますの盛況であった。

蛭川虎三京都府知事は「医術、医学、医業」について講演し、第一病理学教室三宅清雄教授は「培養ヒトがん細胞の生態」について、第三内科学教室増田正典教授は「消化器病百年の歴史と展望、とくに胃癌を中心として」を講演した。また第一外科学教室間島進教授は「胃癌外科の過去、現在、そして将来」について講演し、最近の医学界の中で、特に研究が盛んであり、原因が未だ不明とされている癌についての研究発表を行ない、聴視者の関心を集めながら幕を閉じた。

なお式典に述べられた式辞については、非常に意義深いものがあるので、ここに列記し記録をとどめる。

(付記 百周年記念事業に関する記録は、青蓮会報に詳細に記載されている。本史にたらざるところは、それによって載きたい。また、百年の歴史は近畿TVによって映画にまとめられ、一般に放映された。そのプリントが本学に残されている)

(水越 治)

学 長 式 辞

本日ここに多数の来賓各位、ならびに学友のご臨席をいただき、本学職員、学生とともに、京都府立医科大学創立百周年記念の式典を催すことの出来ますことは、誠によるこぼしく感謝に堪えないところであります。

かえりみますと、今から恰度百年前、永い鎖国から解放されました我国におきまして、この京都の地にも西欧の新しい文化が滔々として入ってまいりました。当時の榎村正直京都府参事は、明石博高小属を療病院掛として粟田口村青蓮院に仮療病院を設置し、医師の養成を開始いたしました。これが実に本学の創生であり、時正に明治5年11月1日でありました。

爾来百星霜、本学は幾多の変遷を閲し、また幾多の風雪に耐えつつ、医学の府としての指導的役割を常に力強く果してまいりました。

すなわち、明治13年には現在の位置に療病院が設けられ、明治15年には甲種医学校の許可を受け、明治33年に医学専門学校となり、大正10年には医科大学に昇格いたしました。ついで昭和19年より一時期女子専門部が附設され、昭和27年には新制大学としての発足をみ、昭和32年にいたって大学院医学研究科を併設して今日におよんでおります。その間6,744名におよぶ俊秀を世に送り、学友の活動は全国各地はおろか、国外にもわたり、医学の各領域に多くの金字塔ををうちたてるにいたりました。

このきわめて永い足跡をふりかえりますとき、本学のあゆみは、特に大きく躍進はいたしました、反面恰も廃絶の危機にひんしたことも一再ならずあったと伝えられております。

しかしながらこの間、同窓各位の生命の尊厳とその奉仕者というひた向きの医への使命感、真理探求

と医学の本質追求への情熱、限りない愛校の精神、加うるに文部省ならびに京都府当局、京都府民のみなさまの暖かいご理解とご支援に支えられまして、本学の歴史は連続と続き、ついに本日のこの栄光の日を迎えることができたのであります。

私ども本学に職を奉ずるものといたしましては、誠に同慶に堪えず、その喜びと感謝のまことをどのようにして現すべきか、その言葉を知らない次第であります。

私どもは創立90周年の頃から、大学百年をひとつの目途といたしまして、学内の整備、拡充の計画を進めてまいりました。その結果の全学の一致した熱意と、嵯川知事ならびに府民各位のご厚意により、3期にわたる臨床診療棟、基礎医学学舎、臨床医学学舎、そして最後に本年8月には進学課程花園学舎の完工をみ、一応この企図を完成して本日を迎えることができました。今を去る20年、創立80周年の記念式典が未完成でありましたこの記念講堂で開かれました当時は顧みみますとき、医学の進歩と一般社会の情勢に対応して、本学の景観と内容がいかにもまぐるしく進展いたしましたか、誠に驚嘆を禁じ得ぬものがあります。しかもこの20年の間には先年の大学紛争に当って全学が経験いたしました過去の医学教育制度に対する鋭い反省の機会もあり、私どもはこれを一つの転機として医学教育、研究の場としての新しい時代に即応した大学を建設するため今なお鋭意努力を重ねております。

今このときにあたり、私どもは世紀にわたる本学の歴史の厚さと、この間多くの困難に遭遇しながらよくこれを克服されました歴代の校長、学長を始めとする先人の辛苦を思い、ここに百年を迎えた誇を心ゆくまでかみしめますとともに、次の世紀への第一歩を踏み出すべく覚悟を新たにしなければならぬと存じます。

すなわち、まず医の倫理を基盤とする高度の医学教育を実施いたしますとともに、そのためにこそ全学をあげて、常に国際的視野にたち、その評価にこたえることのできる独創的な研究成果をもたらすよう優れた人材の育成と、新しい機構と設備の充実を一層はからなければならぬと考えるのであります。

過去の医科大学は教育、研究、診療の3つの機能の優れた場となることをもって最大の目標といたしました。私どもは百周年を契機として、教育と研究を通じまして高められました優れた医学を、たんに大学のみのものとせず積極的に地域社会に還元することが、これからの医学または医科大学のあるべき姿と考えたのであります。これが昨年より発足いたしました医療センターの構想であり、これによって私どもは全学の英智と、大学に劣らない近代設備と若いエネルギーをもって、医療過疎への対応にとりくみ医学、医療に関する社会的要請にこたえとともに本学の発展をはかり、今後一層この方面にも視野を向け、学友各位、府民のみなさまの期待におこたえする覚悟であります。

最後に記念会館について一言いたしたいと存じます。さきに全学友会の熱烈な要望に対する京都府当局の特別のご配慮により、百周年記念会館建設のための用地が準備されました。私どもはこれのご厚意にこたえ、社会により高度の医学を提供するための本学を始めとする医師研修の場とし、また京都府民ひいては京都市民の健康講座の場とし、さらに本学百周年の歴史的資料、換言いたしますと京都の医療についての資料保存の場としての記念会館の建設を企画いたしました。幸に学友各位、その他多くのご賛同を賜り、予期いたしました準備を整えることができました。本日その竣工の喜びをみなさまとともにしたいと願ひ、努力を重ねてまいりましたが、この計画のみが遅れておりますことは誠に遺憾で京都府

当局、またご協賛いただきました学友各位、その他の方々に対し誠に申し訳けないと存ずる次第であります。しかしながら記念会館の建設の構想は、「健やかに命永かれ」との社会の要請に応ずる学友各位の熱意の現れであるといたしまして、でき得る限り早く完成し、大学、学友の発展と、府民のみなさまのために役立つようになるよう努力いたしたいと存じます。

最後に臨み、ご臨席の各位に重ねて深謝いたしますとともに、本学に対しまして今後益々深いご指導とご援助を賜りますようお願いいたしまして私の式辞を終りたいと存じます。

昭和47年11月3日

京都府立医科大学学長 中村恒男

京都府知事祝辞

本日、ここに京都府立医科大学創立百周年記念式典が挙行されるにあたり、来賓・学友のかたがたをはじめ、多数のご参加をいただきましたことは、知事といたしましても、まことによるごびにたえないところであります。

申すまでもなく、府立医科大学は、明治5年11月、粟田口の青蓮院内に、京都府仮療病院として創立され、以来、幾多の風雪にたえ、近代医学の研究と教育・診療に輝かしい業績をつみ重ね、京都府のみならず、わが国の医療の発展に大きく貢献してまいりました。そして多くの有為な医師・医学者を世に送り出し、また府民の「府立病院」として信頼され、親しまれてこんにちにおよび、きょうここにめでたく創立百周年をむかえることになったのであります。

この間、建物・設備の充実も着々とすすみ、とくに最近数年間において、臨床医学学舎をはじめ、診療棟・基礎医学学舎・進学課程学舎などの整備が急速に進められました。また、昨年は、全国にさががけて地域医療を目的とした医療センターも生まれるなど、大学の使命達成と府民の健康を守るための大きい前進がみられております。このことは、大学関係者のかたがたのたゆまぬ努力と、府民の皆さんの深いご理解・支援によるものと、深く感謝するしだいであります。

明治・大正・昭和と、世の移り変わりとともに、医学・医術・医業も、大きい進歩と変革をとげてまいりましたが、また一面、現在ほど、人間の生命の尊さが問い直されているときはないと思います。すなわち昨今の急激な高度経済成長政策は、人間をとりまく環境の汚染・公害・過疎過密など、多くのひずみを生み、われわれに問題をなげかけており、同時に、人間の生命の尊厳、ひいては人間社会の未来といったものについて、数多くの課題と示唆を与えています。このようなときこそ、われわれは、人間の生命と健康を守るべき医学というものの本質と使命について、深く考えてみる必要があると痛感いたします。

本学が、この記念すべき日を契機として、さらに次の百年を展望し、新しい時代の医科大学として、ますます前進されますことを念願いたしますとともに、知事といたしましても、府民各位のご理解・ご協力をえて、なおいっそうの発展を期してまいりたいと存じます。

昭和47年11月3日

京都府知事 蛭川虎三

学友会会長祝辞

菊花かおる今日の佳き日に、歴史と伝統を誇る母校百周年の記念祝典に参列して、蛭川知事始め多数のご来賓、大学関係者、ならびに学友諸兄に学友会を代表して祝辞を述べる機会を得ました事は、私にとって生涯忘れ得ぬ喜びであり、最も光栄とするところであります。学友会は卒業生ならびに母校にて研鑽された出身者を主たる会員とし、今までに総計6,744名におよんでいます。会員は常に母校との緊密なる連絡を保ちつつ、会員相互の親睦をはかると共に、研修につとめ、母校における福祉厚生、医学の研究、奨励に寄与してまいりました。さらに昭和35年には、財団法人青蓮会を設立し医学研究の奨励助成、一般社会における医学知識の普及、文化向上の発展に貢献してまいりました。

百周年記念事業の、最大の目標の一つとしての記念会館の建設用地は、知事の特別のご好意により梨木神社境内地を買収せられました。また建築資金は全学友諸氏、大学関係者各位の絶大なるご支援により、目標額を達成することができましたことは、この上もなく喜ばしいこととございます。しかるに、諸般の事情により会館建設の着工が延びておりますが、あくまで基本計画通りに完遂いたす所存であります。記念会館完成の上は、青蓮会の設立趣旨に沿い、大学の福利厚生、親睦、研修、ならびに府民の医学知識の普及向上に、大いなる役割を果すものと確信いたします。

次の世紀の母校の発展は、一に若き世代の英智と実行に俟たなければなりません。かくて歴史ある母校が画期的研究をすすめ、良識ある優れた医師を育成し、府民ひいては全国民の医療、健康増進に貢献する、明朗な学園の確立を切望いたしております。この機に学友会は会員諸兄の、相互の親睦と団結をさらに一層強固にし、母校と一層の連繫を保ち、母校の発展と学風の昂揚に寄与いたしたく存じます。

ここに、私は全国各地で活躍する学友諸氏と、心から母校の発展を祈り、百周年のお祝いを申し上げ、祝辞といたします。

昭和47年11月3日

財団法人青蓮会理事長 古玉太郎
学友会会長

文部大臣祝辞

本日、京都府立医科大学創立百周年記念式典にあたりまして、ひとことお祝いのことばを申し述べたいと存じます。

京都府立医科大学は、明治5年栗田口の青蓮院に設けられた仮療病院で、患者治療のかたわら医学上の教育を行なったことをもって、濫觴とされるとのことでありますが、その後、着実な歩みを続けられ明治36年には京都府立医学専門学校となり、さらに大正10年には京都府立医科大学に昇格したわけでありまして、わが国最初の公立医科大学として、また、完備した施設設備とすぐれた教授陣容とによって医学教育界に確固とした存在を誇っているところであります。

この間百年の長きにわたりまして、医学教育に重きをなすとともに、その教育研究を通じまして、わが国医学研究の進展と医療技術の水準向上に大きな寄与をされているところでありますが、とくにすぐれた卒業生を多数世に送り、わが国の医療の発展に貢献された業績は、きわめて大きいものがあります。本大学の、この光輝ある歴史と今日の隆盛は、ひとえに歴代の大学当事者の日々の御努力と、設置

者である京都府当局ならびに京都府民の理解と協力のたまものにはなりません。

本日の式典をお祝いするにあたり、皆様方のご労苦とご熱意に対しまして、深く敬意を表する次第であります。医学教育に対する国家社会の期待と要望はますます高く、本大学に寄せられる期待も、また極めて大きいものがあります。教職員各位ならびに学生諸君におかれましては、ここに深く思いをいたされまして、さらに相互の親和を深め、教育研究の成果をあげるとともに、真の医の倫理をきわめられて、大学の名声をますます高められんことを希望いたしましてお祝いのことばといたします。

昭和47年11月3日

文部大臣 稲 葉 修

府議会議長祝辞

菊の花かおるきょう文化の日、ここに京都府立医科大学の輝かしい創立百周年記念式典にあたりまして、京都府議会を代表いたしまして、心からお祝辞を申しあげる機会を得ましたこと、私の最も喜びとする次第であります。

歴史的な本学の経緯をふり返って見ますと、先程、学長も申されましたように今から百年前の明治5年に粟田口の青蓮院の地に、その昔、聖徳太子が施療病院を創られた故事に倣って、仮の療病院を創られた。そして、医学をめざす人々の教育を始められたのが、そのはじめであると聞きおよんでおります。そして、このきっかけとなりましたのは、当時、京都は千年の都でありましたが、東京遷都によって京都がだんだんさびれて行くということを憂いました当時の先覚者であります楳村知事や、あるいは、初代議長でありました山本覚馬氏、あるいはまた、明石博高氏等によって、旧弊を打破し、西欧の文明を吸収し、この地に京都府民が将来、発展を、意欲を高めるためにいろいろ革新的な施策を推進して参りました。これらの人々の、先覚者の功績は、今もお高く評価されておるわけでありませうけれども、この人達の大きな運動が本学を創りあげる大きな基礎になったと聞き及んでおるわけであります。

期熟しまして、明治13年には当地に医療療病院が延設され、さらに、明治翌々年の15年には医学校として認可を受け、36年には医学専門学校となり、更に、大正10年には医科大学に昇格し、そして、戦後27年に新制大学となって発足し、32年には大学院を設置され今日に及んでおるわけであります。その間百年数、多くの優秀な人材を輩出され、この人達は、あるいは未知の医学を探求するために研究部門に進まれ、あるいは、また、社会に出て医業を通じて社会のために貢献をせられて来ました。京都府立医科大学が、京都府民の研究、医療機関として果してこられた成果は、本学百年の歴史とともにわかり知れない大きなものがあると思います。

思いますに、一世紀という長い百年の間、進んで来られました歴史の中には、その時々々の経済・社会の変動によっていろいろ苦難の道があったことであろうと推察をいたします。しかしながら、この間に医療の変遷あるいは、医学・医療行政の変革などにあいながらも、ただ一筋に命永かれと願う多くの府民の期待にそって、関係者の皆さん方が医学を追求し、更に、科学文明を吸収し、その時代のいろいろな問題に対処しながら本学と病院の発展のためにつけて来られた数多くの関係者の皆さんにこの機会に深く敬意と感謝を申しあげる次第であります。しかも、この大学は、先、申しましたように医療施設ができて教育施設がそれに附随したという特色を持っております。このことは、蜷川知事がいつも言

われておりますように「府民の暮らしの中であって、府民の健康と命を守る」という、その成果の発展の中に進んで参りました医科大学ならびに附属病院は、まさに京都府の歴史であります。京都府にとって誠にふさわしい存在であるといわなければなりません。百年の歴史をふりかえり見まして、お互に更に次の百年に向って新しい前進を遂げるために関係者の皆さんの更に一層のご協力をお願い申し上げる次第であります。京都の医科大学は、公的病院として最も古い歴史と伝統に輝いているわけであります。どうかこの古い歴史と伝統を守って、更に輝かしい前進を遂げたいと思います。

私共、京都府議会におきましても、先覚者であります初代議長の山本覚馬氏の功績に学び、府立医科大学が持つ意義役割を深く認識いたしまして、更に本学の前進のために尽力をいたしたいと存じておる次第であります。

皆さん方のご健康とご活躍、更に本学の輝しい限りなき前進を念願いたしまして、簡単でございますが、一言お祝いのごあいさついたします。

ありがとうございました。

京都府議会議長 橋 堅太郎



